## カナダ人物記⑫

### 難民救援に生涯をかけた
# ロッタ・ヒッチマノーバ

一九八〇年十月、救世軍のような制服に身を包んだ小柄な老婦人が、カナダ総督賞の受賞式で暖かい賛辞を浴びていた。カナダ・ユニタリアン・サービス・コミティ（ＵＳＣ）の創設者で三十六年間にわたって一貫して第一線で難民や貧民の救援に携わってきたロッタ・ヒッチマノーバに、カナダ人にとって最高の栄誉であるカナダ総督賞（しかも最高位のコンパニオン賞）が与えられたのである。

ＵＳＣは一九四五年以来、世界で最も援助を必要としている人びとに、人種、宗教、政治、信条の区別なく、医療や衣食、教育の援助の手を差し延べてきた。

オタワに本部を置いて、ヒッチマノーバを先頭に全部で十九人のスタッフが、バングラデシュ、ボツワナ、インドネシア、レント、ネパール、スワジランドなど、第三世界の救援に当たっている。ＵＳＣが現在かかわっている援助計画は、農業、保健衛生、教育など二百五十件に上り、カナダ各地の支部六十か所のボランティアが常時これを支えている。

ロッタ博士――人びとはヒッチマノーバのことを敬愛をこめてそう呼ぶ――は、チェコスロバキアの首都プラハの、裕福な実業家の家に生まれた。パリのソルボンヌ大学で学び、プラハ大学で哲学の博士号をとり、さらにパリ大学でジャーナリズムを学ぶ。一九三八年、二十九歳のとき、ジャーナリストとしてヒトラー批判の記事を書いて亡命を余儀なくされる。南フランスへ身一つで逃れたロッタ博士は、ひもじさと孤独に耐えながら、当時フランスで亡命者や避難民の救援活動を行なっていたユニタリアン・ユニバーサリスト・サービス委員会を手伝っていたが、一九四二年、政治亡命者としてカナダへ渡る。

戦争が終わったとき、ロッタ博士の心を占領したのは、何百万、何千万の難民や罹災者の群れだった。住む家もなく、身寄りも食べ物も失った戦災孤児の姿にかつての自分を重ね合わせて見た時、彼女のその後のライフワークが決まった。

Canapress
ロッタ・ヒッチマノーバ

彼女は直ちにボストンのユニタリアン・サービス・コミティに、カナダで同種組織を作る許可を要請、小規模ながら体当たりで救援活動に乗り出した。三年後にはすでに、〝真心ある救援組織〟として内外に知られるようになる。一九四八年には、無宗派性を貫くために、ユニタリアン教会から完全に独立。朝鮮戦争では、避難民救援を国連から依頼され、七六年にはベトナム政府から疲弊しきった現地を視察するよう招かれている。

ロッタ博士は、自分の使命を、〝一番困窮している人びとに、差し迫って必要な手助けをしてやる〟点に限定した。だから、たとえどんなに些末なことでも、人々に差し当たり必要なことを理屈抜きで実践する。

自分で現地を回って歩くのも、ロッタ博士の特徴である。難民キャンプのテントや泥小屋に寝泊りして、人びとの要求を聞き、実情を把握する。なぜそんなに現実的なのかと聞かれて、彼女は自分が女だから、と答えている。現地へ行って真っ先きに話をするのは婦人だ。婦人は政治的動機やイデオロギーよりも、まず子供のいのちを救う事を要求してくる。

ロッタ博士は、資金集めにカナダ全国を飛び歩いた。一日二十四時間、一年三百六十五日が、人びとのためにあった。結婚もせず、友人と親交を温める暇もない。淋しいといえば淋しいが、「これは私にとって責任の問題、良心の問題なんです」と彼女は達観している。

フランス、インドなど海外から多くの表彰を受け、今年六月には国際ロータリー・クラブの賞を受けた。昨年七十二歳になった彼女は第一線を退き、現在は後輩の指導と会史の執筆にかかっている。

## 編集後記

●対加投資特集をお送りします。十月に大阪と東京で開催された日加産業協力セミナーでの講演を要約した上、新たに情報を加えて編集しました。

●総花的になった感じはありますが、とかく不満や懸念の声が強かった外国投資審査法の改善、産業基盤の整備、税制上の優遇策などに関する記事によって、投資受け入れに対するカナダの意欲を感じとり、また理解を深めていただければと思います。

●カナダ三菱の奥沢社長と三洋工業カナダの佐藤副社長の講演には、実際の体験者としての有益なお話が沢山ありましたが、残念ながらスペースの都合で他の講演同様、大きく割愛せざるを得ませんでした。

●カナダ投資についてなお詳しくお知りになりたい方は、当大使館の商務部にお問い合わせ下さい。

（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。
〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部